

『学際』 1969年7月（発行元不明）

《 現代の爆発を考える 》 最終回

教育の爆発

矢 口 新

爆発物としての教育

教育とは社会の自らの形成活動であり、その組織的な活動の総体をいうのである。それは一言にしていえば、人々の動きであり、教育するものとされるものとの二つの種類の人々の交錯として存在する。こう考えると教育は、本来爆発物として考えてみるのがよいようである。何時の時代でも、教育は社会の営みとして、教えるものと教えられるものとの間の微妙なバランスの上に成立している。一方からいえば不安定なバランスである。一つの社会が二つの側面から要求を出して来る。それが教育する側と教育される側である。このバランスが社会の事実としての教育をつくっている。社会が動くと、そのバランスがくずれて、爆発がおこる。そして新たな変貌した教育がおこり新しいバランスが生まれる。

利益を追究する集団の中での人々の結合は、一つの目標に向かっての結合である。その結合は目標へ達する仕事の分担として成り立つ。教育も大きくいえば社会の自己形成という目標へ向かっての営みであるがその営みとして成立する社会的人間関係は、教えるものと教えられるものという関係である。店とお客の関係にある。そのバランスにおいて、教育の営みが存在する。その点で、利益を追究する集団と異なった結合関係なのである。

教育するものも、される者も、共に社会の生み出した要求を背負っている。しかし二つの異なった人々の動きとして教育の制度、慣行のわくの中で交渉している。そのバランスが、教育の営みなのである。このバランスを保って存在する制度、慣行は、風船のごとく、伸縮自在である。社会の動きを微妙に反映してふくれたり縮んだりするが、社会の動きのエネルギーが大きいと、風船は破裂して新たなバランスを生み出すのである。

社会の動きの急激なとき、風船が破れて新しいものが生まれる例として、明治維新の時の教育変革を思い浮かべればよい。武家と町人の二つの教育類型があって、それらがそれぞれ制度、慣行を維持していたが、明治維新とともに全く異なった教育に生まれかわった。以来百年、内部に時折の爆発はあったが、いずれも風船をふくらます働きをしつづけて、教育は伸長してきたのである。そして現在にいたった。

ここ三、四年来、教育の爆発という言葉が盛んに語られる。どこにどういう爆発があるかといわれると自然物ではないから、明らかに認めがたいこともあり、また人によって見る所がちがうのである。

だが、従来、教育を爆発物として見る見方は稀薄であった。むしろそれは、静物のごとく静かに存在するものと考えられていたのではないか。国のつくった制度があり、人々はその制度のなかで静かに学ぶ。教育とは、社会の動きを超越して、いつの時代でも人間をつくるという本質的な仕事をする営みであって、世俗とは関係のないものであった。それは人間性に関することであり、時代によって軽々に動く力ではないのである。社会と隔離されていてもよいのである。社会から超然としている所に成立つものであると考えられた。このような錯覚が成立したのは、教育が百年来大した爆発なしに存在してきたからであろう。

錯覚の上に成立つ平和はやがてくずれるように、教育のバランスも次第にくずれはじめた。大学の紛争はその一つのあらわれであろう。それについては後で述べるが、人々の錯覚をこえて、教育はバランスをくずし、爆発をおこす。社会が動けば、教育も動かねばならぬのである。恐らくこれからしばらくの間教育は爆発し続け、やがて新しいバランスをつくる時がくるのであろう。今はその過渡期である。

教育を爆発物と見る考え方は、現代教育をみるにふさわしい物の見方である。それは教育の発展に重要な示唆を与えるであろう。

教育爆発のはじまり

現在の教育爆発のはじまりは、戦後の中等教育改革、すなわち六三三制の採用にあるといつてよい。これはアメリカの六三三制のまねであったが、それは中等教育の大衆化の路線を実現する方策であった。これはアメリカの教育支配の時代の方策で、どちらかといえば教育する者の側に立った要求であった。戦後の混乱の時代に中学校三年を義務制としたのは、一つの大きな決断であったが、この時に教育爆発の連鎖反応がおこるのであろうことは予想されたことであった。果して、後期中等教育の準義務教育的状態が20年たらずで実現した。そればかりでなく、大学の教育に対する要求もどんどん増大する。教育を受けるものの側の意欲は今後もまだまだ積極化するばかりであろう。これの根底にはもちろん社会の経済発展が影響している。しかしこういう状態の中で教育の微妙なバランスがくずれはじめた。教育を要求する層が大量にできあがって行く。このことは単に数の増加のみにとどまらない。教育の多様化を要求する。つまりそれまでなかった新しい形の教育を求めるにいたる。

それに対して教育するものの側の動きは必ずしもよいバランスを保っていない。どちらかという、猛烈な要求にこたえかねる状態なのである。もう少しザックバランにいうと、30年前の教育の制度慣行の延長上でしかものを考えていない。事態の真相を把握することができなかった。いかなる社会の要求が、それを生み出したかを見る眼がなかったのである。結果は、この新しい教育を要求する人々に対する適切な方策が生まれないうまで日を過ぎてきた。これが、教育のバランスに奇妙なひずみを起こさせている。

教育に混乱がはじまる。教育ママが出現する。学習塾が生まれる。受験教育は遂に受験戦争にまでエスカレートする。予備校は新しい教育の制度となってしまっている。しかも教育するものの側にそれに対応する策がない。誰もが憂慮しながら誰にも手がない。過去の殻が破れない。こういう爆発は、教育の破裂を招きかねなくなっている。しかしまたそれに気がつかないでいる人

も多いのである。

増大する教育大衆の要求は、従来なかった多様な形の教育を生み出す。教育もまた需要供給の経済法則にしたがって展開する。求めるものにこたえて、新しい教育を売る商売が生まれるのである。予備校も学習塾もそうであるが、新しい各種学校もまたそうである。企業内教育もそうであり、さらにそれをマーケットにする企業内教育屋も生まれる。教育という社会的な営みが、これまでとは異なった所で営まれるようになる。ここまで来ると、教育が爆発現象をおこしているのではないかという認識もおこってくる。社会の動きが教育になんらかの変革を要望しているのではないかと漸く気がつくのである。教育の爆発が自覚されはじめたのである。

爆発対策のおくれ

教育の爆発を単に量の急激な増加と考える考え方があるが、それは爆発の見方がないということである。ただ従来の延長上のみ、ものを見るということである。ものの見方の硬直化である。

バランスの破れは、逆に量の減少にもあらわれる。たとえばいわゆる社会教育とよばれる一連の制度慣行がある。これは青年学級とか婦人学級とか、講座講習などを含んでいるが、それらは全体として衰退が著しい。これは一つには、これらの教育が従来主として農村向きの活動であったが、最近の著しい都市化現象によってその機能を失ったということにあるといわれている。しかし都市における社会教育がそれでは何故発展しないのか。このことは教育を、教育するものとされるものとのダイナミックスとしてみると、明らかにバランスのくずれなのである。だから社会教育の衰退としてとらえられる現象は、一方において、これまで教育の範疇にいれられなかった所での新しい教育の膨張となっている。しかしそれが見えないから、ただ社会教育の衰退としてのみ目にうつる。ここ十年来、都市化現象は続いているのに、対策が出ないのである。社会教育の動脈硬化であろう。それは教育の爆発が明確に感じとられていないということである。

教育が社会の動きを反映して、教育されるものとするものとのバランスにおいて成立つというこの見方の欠如が、教育の爆発を爆発とみないで、やがては破裂に導く結果となるのである。新たなエネルギーの結集としての教育が生まれないと混乱が生ずる。

これを端的に表するのは大学紛争であろう。教えるものと教えられるもののアンバランスをこれは見事に示している。教えられるものの側の求めるものに教えるものの側がついて行けないのである。百年一日のごとき大学が新たな社会の動きにこたえることができないのである。百年来つづけられてきた大学の教育慣行は、もう改められるべきであったろうに、依然として昔のままに続けられた。教授は週に何時間か演説をしておることで、教えられる者の要求にこたえられると思っていた。膨大な量の学生が、そこに実質的な教育関係を見出し得ないでいる。学生の生活は毎日なんらの充足感なしに過されて行く。最高の学府といわれる大学の叡智も遂にそれを感じとれなかったのである。戦後20年間における大学の場における教育の爆発が、爆発として受けとられなかった所に、最近の大学の紛争があるのである。いまやその爆風によって周囲のものはねとばされかねなくなっている。混乱と破滅がきそうな状態となっている。

本来爆発物的な存在である教育は、現在きわめて危険な状態にある。新しいバランスを成立せしめる時がきているのである。

教育の拡大均衡

明治以来百年間たえまなく歩みつづけてきた社会は、いま新しい転機に直面している。後進国から中進国ないし先進国へのななまより、新しいこれまでとは異なった国際環境での活動などという自覚が生まれている。国際化時代における国際競争力の増強とか、技術革新への努力とかがいわれるのも自覚のあらわれである。

これらのことは人間のあり方としていえば、これまでと異なった働き方、生き方を必要とするということである。毎日の現実的生活場面で新しい動きからくる新しい行動の仕方を、人々は徐々に感覚しはじめている。それは切実な実践として決断を迫っている。それらの積みあげが新しい人間像の自覚となり、新たな教育への要求となってくる。社会の人々にとっては、真剣な生き方の問題として、教育が求められているのである。それは古い教育の制度慣行にとらわれないで要求する。そこに教育の爆発現象がおこるのである。それは最初は混沌であるかも知れないが、次第に明瞭な形をおびてくる。爆発は連鎖反応をおこして、次々と進行して行く。

これらの爆発をどのように新たなバランスにもって行くかが現在の課題なのである。それは一言にしていえば、教育の飛躍的な発展ということであろう。新しいより高次の段階でのバランスを回復することなのである。それはどういう方向においてであろうか。

新しい酒を古い袋に入れることはできないと同様、現在爆発している教育はもう古い枠の中へ閉じこめることはできない。古い制度慣行の中で、これだけの新しいエネルギーをおさめることは不可能なのである。教育は新しいシステムをつくりあげる時がきているのである。

現代は教育における産業革命の時代だといわれている。このことの意味はなかなか深いようである。産業革命が、動力の利用を契機として新しい生産システムを開発し、手工業の時代から一挙に大量生産の時代を現出して、新しく生産と消費のバランスを拡大均衡にもって行ったように、教育も今やそういう時代になっているのである。

考えてみれば、教育は百年来手工業の時代を続けてきている。教育の場で使用される道具は、言葉以外にない。教科書を読むというの、結局は言葉である。言葉を使って、教師がそれぞれ演説をする以外の方法で教育は行なわれてはいないのである。まことにさびしい姿である。もっと別な形で、人間の能力は開発されないものか。

たとえば、コンピューターによって生徒の学習活動を援助することは工夫されないか。コンピューターのスピードは何十人、何百人の生徒に対して、各瞬間に個別に対話を可能ならしめる能力をもっている。コンピューターから生徒に質問を出す。生徒が答えるとその答を分析して、また次の指令を出す。もちろん生徒の方の質問にもこたえる。このような教育の場が実現すると、一人の教師が何十人の生徒に対して、一方交通的な演説をする。たまに一、二の生徒の質問に答えるというさびしい教育は全く変貌する。これはもう夢物語りでなく、現に諸外国では実現しつつある。

教育を求める大衆が、一人一人の能力を向上させるために、このようなシステムに入るということになる、これまでの教育の姿は一変する。学級をつくって、50人が一斉に進行するなどという形、学年ごとに一定の教育が行なわれるという形は解体せざるを得ないであろう。一人一

人が自分のペースで学習をして行くという形が当然とられるのである。そうすると新たな生徒の集団組織、新たなその管理など全システムに大きな転換がくる。

これは一例にすぎないが、現在世界の大勢はこのような方向に進んでいる。つまり教育が新たな科学技術体系としてつくり直されるということである。ちょうど産業革命によって新たな生産システムが生まれたように現代の教育爆発は、新たな人間形成システムを要求しているのである。

このような教育システムの転換には、社会の莫大なエネルギーが必要である。学校という施設、設備のあり方から、教材教具といわれるものから、すべてが新しいシステムとして再編成、再構成されねばならぬであろう。それは産業の力をかりなければならない。さらに教育者が手工業者からシステムの設計者へ転向しなくてはならぬ。その再教育も必要である。これら莫大な社会のエネルギーを要求するのが、教育の爆発なのである。

(やぐち・はじめ、能力開発工学センター所長)